グローバル化するラグビーと日本ラグビーの今後に関する研究
A study about rugby turn into global and the future of rugby in Japan

1K06B003　　坏　萌奈
指導教員　主査　石井　昌幸先生　　副査　寒川　恒夫先生

【はじめに】

２０１６年の夏季オリンピック追加種目に７人制ラグビーが加えられることが決定し、２００９年7月２８日には、２０１９年の第９回ラグビーワールドカップの開催地として日本が選出された。これがアジア圏での初開催である。この流れは、ラグビーというスポーツと、それを統括する国際ラグビー連盟（ＩＲＢ）がこれまでになかった規模でのグローバル化路線に乗り出したことと、それに対応して日本協会が国際舞台により積極的に関わろうと動き出したことの双方の動きが合致した結果であった。２０１９年ワールドカップ開催は、日本ラグビー界にとってもラグビー界そのものにとっても新たな歴史の１ページとなるに違いない。本研究では、２０１９年ラグビーワールドカップ日本大会へ向けて今一度、ラグビーというスポーツを客観的な視点でとらえる機会としたい。

【第一章】

第一章では、ラグビーワールドカップについて取り上げる。ラグビーワールドカップの歴史はまだ新しい。１９８７年のニュージーランド・オーストラリア大会に始まり、過去に6回開催されている。２０１１年には再びニュージーランド、２０１５年にはイングランドで開催されることが決定している。改めてワールドカップの歴史を振り返ると、これまでの6回と２０１１年、２０１５年大会も加えてわずか8回の中で、同じ国もしくは地域で繰り返し行われていることが分かる。

【第二章】

第二章では日本ラグビー界における外国人選手・指導者について検証する。ラグビーと他のスポーツでは「所属協会主義」であるという大きな相違が見られる。なぜこの主義のもとにラグビーが成立しているのか、環境や歴史的背景を元に考察する。日本代表においても外国人が占める比重が高まっていき、一時は日本代表の過半数が外国人選手となるなど、外国人選手の隆盛が目立った。しかし近年、ＩＲＢは所属協会主義にも一定の歯止めをかけつつあるのが現実であると言える。

【第三章】

第三章では、実際に日本に外国人選手・指導者が定着して、主に日本代表はどのような変化がもたらされたのか、全体的なプレーのレベルや質は向上し、試合結果に表れたのかを検証する。日本ラグビー界へ外国人選手を導入する取り組みは近年、手厚さを増しつつある。典型的なのは２００８年度から段階的に導入されているトップリーグの外国人枠の拡大･変更である。外国人選手を生かしながら、日本のラグビーを追求していくという目的は、今まさに始まったばかりといえる。

【まとめ】

「所属協会主義」という、独自の形態を持つラグビー。これからの持続的発展のためにも、この伝統を堅持するラグビーは独自性を発揮していかなければならない宿命にある。日本での

ワールドカップ開催に向けて考えた時、現状を見て浮かび上がってくる課題は育成・強化面であろう。外国人指導者や外国人選手のもたらす影響をプラスに変え、来たる本番に向けて日本人選手を主体としたジャパンを作り上げていかねばならない。